

## CEFR に基づいたスキル認定書策定への試み

### Toward the development of standard skill description in language learning based on CEFR

中野美知子 (早稲田大学)  
大和田和治 (東京音楽大学)  
上田倫史 (駒澤大学)  
大矢政徳 (目白大学)  
筒井英一郎 (広島国際大学)  
近藤悠介 (早稲田大学)  
吉田諭史 (早稲田大学)

#### 1. はじめに

欧州共同体(EU)で 2001 年に提案された Common European Framework of Reference for Languages (CEFR)は、50 カ国の言語教育に影響を与え、TOEIC, TOEFL, IELTS, STEP などテストと CEFR の対応表が提示されている現在、語学能力測定の世界基準として確立している。小池生夫(研究代表)の基盤 (A) や投野由紀夫(研究代表)の基盤 (A) も CEFR を我が国の英語教育基準に近づける研究努力として解釈できる。また、熊本大学では GP の一貫として CEFR に基づくコンピテンシーマップを作成したことも CEFR 活用事例として記憶に新しい。最近では、慶応大学の AOP プロジェクトでも CEFR が活用されている。

欧州共同体(EU)では、語学能力をレベル分けし、学習者の Proficiency (A1~C2) を明記した Passport を学習者に与えることが提唱されている。Portfolio や Dossier を英語運用力の見本とし、能力レベルの明記されたパスポートを学習者に与えることは、国境を越えた就職活動に役立つ。グローバル化された時代にいきる大学生には有益な活動であろう。日本でも学生たちに認定書を与えることができれば、グローバル化に応じた対応策となるのではなかろうか？筆者らは CEFR の記述詞(can-do descriptors)の日本語訳を A1 から C2 までレベル別の表にまとめなおし、実務能力認定機構(ACPA)に提出した。European Center for Modern Languages (ECML)には、CEFR を変更してはいけませんが、各国は実情に合わせたシラバスや評価方法を English Language Portfolio (ELP)として考案でき、ECML で閲覧できるようになっている。

この論文では早稲田大学のオープン教育センターで開講している英語教育科目を ACPA で認定をうけ、受講生たちにスキル認定書の発行を要請した研究経過を報告している。教材の改定は 2001 年度から着手し、3 レベルを 6 年かけて CEFR の 6 レベルへと順次改定した。can-do 機能を unit 毎に整理し、CEFR とのマッピング表を提示した。2008 年、2009 年、2010 年に外部審査員に承認を受け、一部 2009 年度より、以下の科目すべて 2010 年の後期から認定を受ける準備が完了した。英語関連科目の証明書は以下の 5 種類である。

#### 1) Basic User (A2 に相当)

<取得条件> General Tutorial English (初級)の修了

WeTEC のスコアが 573 点以上であること (TOEIC525 点に相当)

- 2) Independent User (Pre-Intermediate) (B1 に相当)  
<取得条件> General Tutorial English (準中級)の修了  
WeTEC のスコアが 608 点以上であること (TOEIC565 点に相当)
- 3) Independent User (Intermediate) (B2 に相当)  
<取得条件> General Tutorial English (中級)の修了  
異文化交流実践講座(Media)又は (Social and Global Issues) の修了  
WeTEC のスコアが 733 点以上であること (TOEIC705 点に相当)
- 4) Proficient User (Pre-Advanced) (C1 に相当)  
<取得条件> General Tutorial English (準上級)の修了  
Discussion Tutorial English (中級または上級)を修了し、「A」以上の成績を取得  
WeTEC のスコアが 800 点以上であること (TOEIC780 点に相当)
- 5) Proficient User (Advanced) (C2 に相当)  
<取得条件> General Tutorial English (上級)の修了  
Discussion Tutorial English (上級)または Advanced English Plus を修了し、「A」以上の成績を取得  
WeTEC のスコアが 880 点以上であること (TOEIC870 点に相当)

この論文では、上記 5 種のスキル認定のうち、1)~3)までの認定にかかわる統計的な手続きやデータを紹介する。WeTEC については 2.3 節で述べる。

## 2. 実務能力認定機構 (ACPA)

ACPA に要請した要件は教科書と各課で学習する 2 つの Can-do 項目とタスクに整合性があるかを外部審査員に検証を依頼した。ACPA の書式の詳細は JACET-ICT2008 年度調査研究報告書で掲載された樽松・内藤 (2009 : 393-433) を参照されたい。日本語訳にするにあたり、牛島・大橋 (2004) を参照した。

### 2.1 実験 1 (自己診断アンケート)

North and Scheineider (1998)の自己診断実験の手続きを踏襲し、学生の自己診断とチューターの判断に基づいて、Can-do 項目の困難度と識別度を項目応答理論により、分析した。Spoken Interaction 39 項目、Spoken Production 25 項目、Language Strategies 15 項目、Language Quality 20 項目の計 99 項目を調査した。自己評価を行った学習者は、2619 名で、その内教員から評価を受けた学生は 982 名である。内訳を以下に記す。

表 1 : 実験参加者数

レベル	受講者数
Beginner	32 ( 13)
Basic	417 (153)
Pre-Intermediate	591 (225)
Intermediate	601 (229)
Pre-Advanced	704 (266)
Advanced	274 ( 96)
計	2619 (982)

注：( )内は教員の評価を受けた人数

BILOG-MG 3.0 を用いて、2PLM で項目の分析を行った。推定には EAP (expected a posteriori)推定を用いた。困難度、弁別力は等化後の値である。Spoken Interaction、Spoken Production、Language Strategies、Language Quality の順に学生の自己評価の分析結果を以下に記す。この4つの項目群は、異なる特性を測定するものと捉え、項目応答理論の前提となる項目群の一次元性を維持するために、個別に分析を行った。尚、データ収集の際に、学習者は「ほとんどできない」から「ほぼできる」の4段階で自己評価を行ったが、「ほとんどできない」と「あまりできない」を0とし、「ある程度はできる」と「ほぼできる」を1として、分析を行った。

### 2.1.1 学生の自己評価における項目特性曲線

項目困難度と識別力をレベルごとに分け、平均値を算出した。この平均値を基に描いた項目特性曲線と全ての項目の項目特性曲線(ICC)を以下に記す。

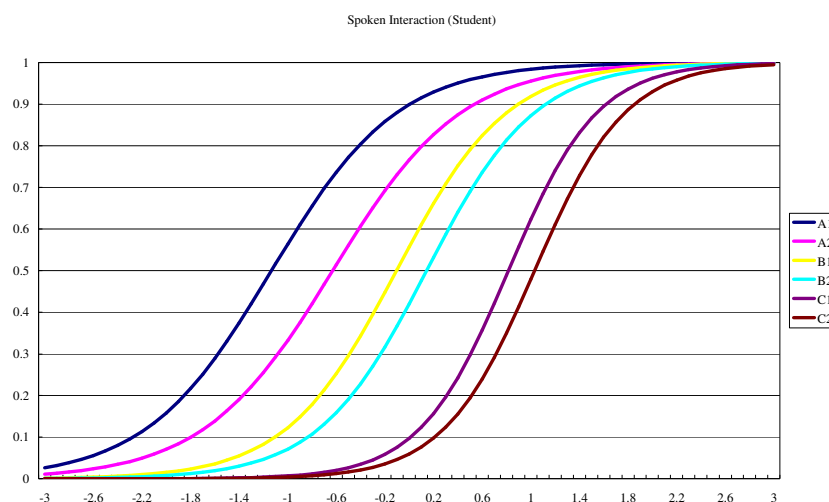


図 1 : Spoken Interaction

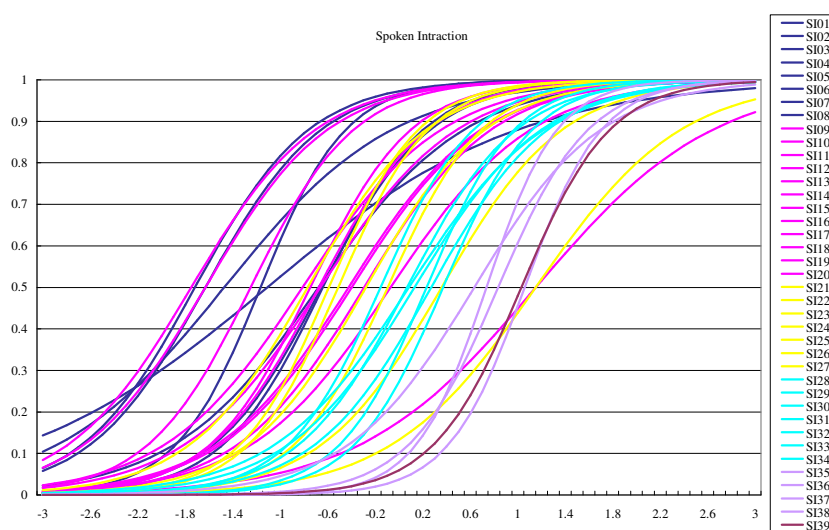


図 2 : 項目ごとの ICC (Spoken Interaction)

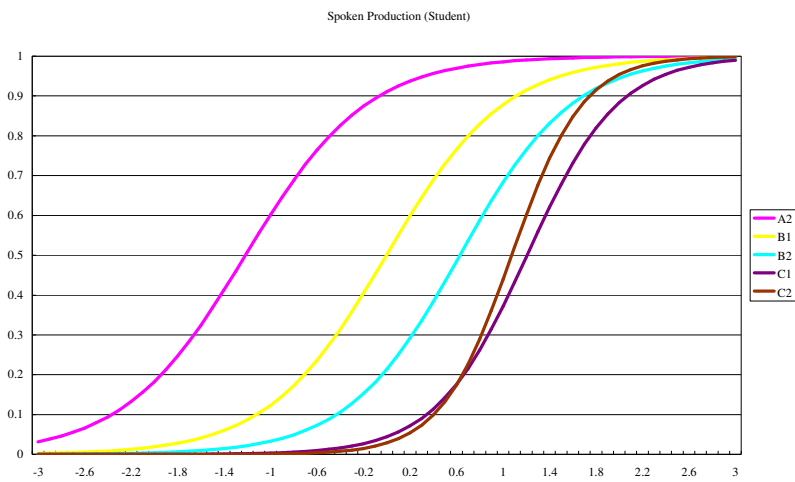


図 3 : Spoken Production

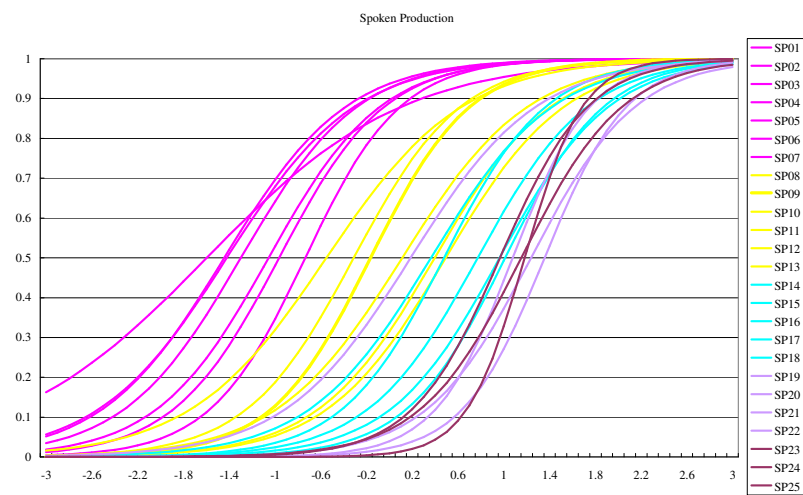


図 4 : 項目ごとの ICC (Spoken Production)

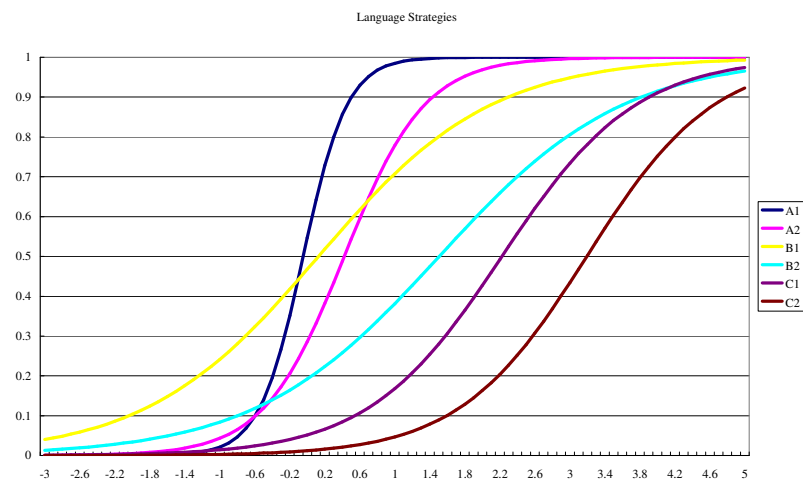


図 5 : Language Strategies

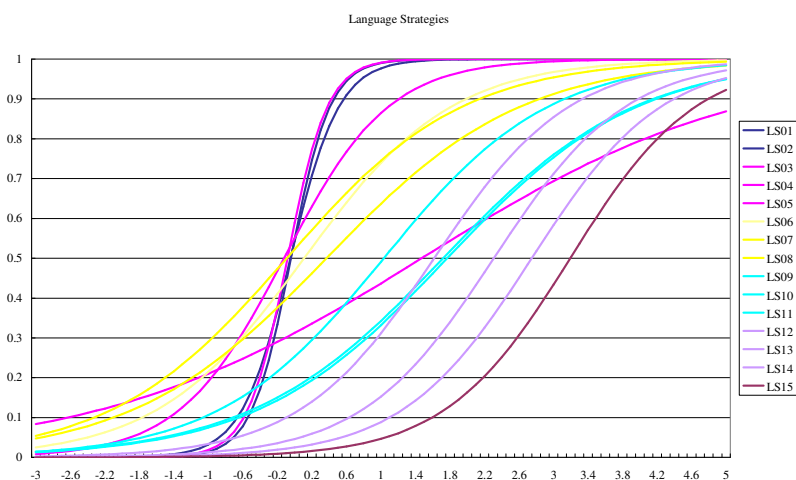


図 6 : 項目ごとの ICC (Language Strategies)

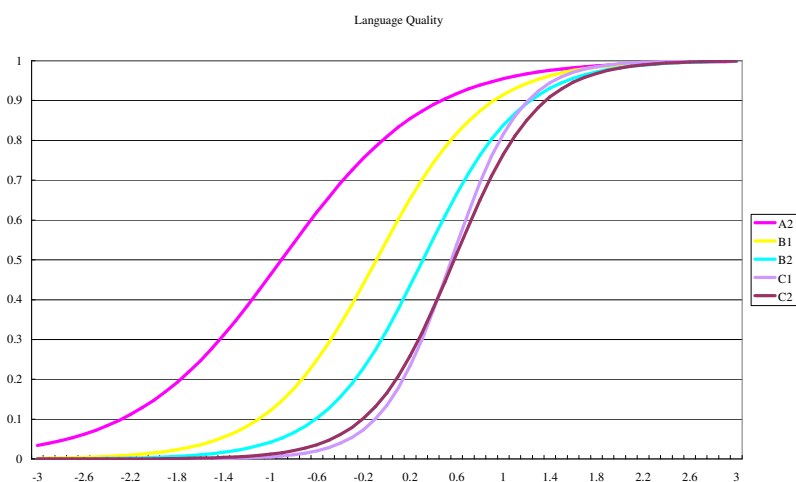


図 7 : Language Quality

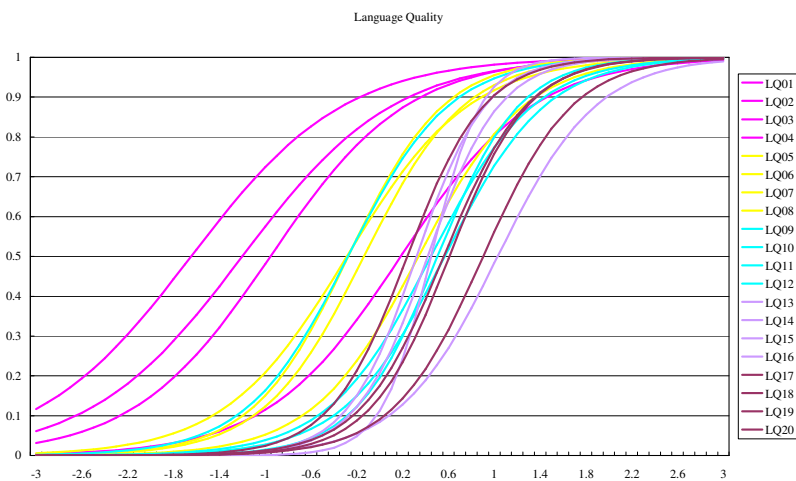


図 8 : 項目ごとの ICC (Language Quality)

ICC 曲線が交差しているものは各レベルで不均衡な学習の程度をしめし、逆に ICC 曲線が交差していないことは各レベルの学習と教材が CEFR に準拠していることを示唆する。この実験の後、交差している項目については教材を修正した。次の表では、チューターと学生の項目困難度の相関を示す。高い相関は、教材の難易度の配列について意見が一致していること示唆している。

表 2 : 項目困難度の相関係数

	<i>r</i>
Spoken Interaction	.849
Spoken Production	.969
Language Strategies	.899
Language Quality	.831

## 2.2 実験 2

早稲田大学の学生のみでは、C2 に位置する学生の数は少ない。遠隔交流をしているアジア人 73 名に自己紹介をさせたデータを教員 10 名が Production の CEFR 記述文に基づいて評定し、多相ラッシュモデルで分析し、欧州での結果と比較した。

表 3: Comparison between EU and Waseda data

	Cut-Off	Range	Cut-Off	Range
A1 lower	-5.39	1.1		
A1	-4.29	1.06		
A2	-3.23	1.02	-3	1
A2 Upper	-2.21	0.98	-2	1.5
B1	-1.26	0.97	-0.5	0.9
B1 Upper	0.26	0.98		
B2	0.72	1.02	0.4	1
B2 Upper	1.74	1.06	1.4	1.1
C1	2.8	1.1	2.5	1.3
C2	3.9		3.8	

Note. The units in Cut-Off and Range are logits

早稲田で算定したロジット得点は欧州共同体での調査とかなり一意していることが見て取れる。

## 2.3 WeTEC 得点

WeTEC とは、Web-based Test of English Communication と呼ばれる、コンピュータ適応型のオンラインテストで、2000 年年当初は 6 セクションあり、語彙、慣用句、会話聞き取り、ミニ講義聞き取り、Minimal Pairs の識別、部分書き取りで、自己診断テストと呼ばれていた。2002 年から英語チュートリアルの受講生が 2500 名から毎年倍増し、9000 名の受講生となったため、教育測定研究所と早稲田総研インターナショナルが共同運営している。コンピュータ適応型の試験は語彙、慣用句、会話聞き取り、部分書き取りの 4

セクションあり、能力値、難易度、識別度、Guessing 率を計測したデータ・ベースから各セクション 25 問ずつ提示されるようになっている。TOEIC との相関が高く ( $r=0.858$ )、早稲田総研では回帰式 ( $y=9.5759x -25.612, R^2= 0.7362$ ) により、TOEIC との換算点を報告している。

ここでは、Bernstein and Balogh (2005)の提案と English Testing Service (ETS) の提案する TOEIC 得点と CEFR との関連を考察する。Bernstein and Balogh (2005)は学習者母集団に占めるそれぞれのレベルの学習者の占める割合を次のように提案している。

表 4: CEFR の 6 レベルの英語使用者比率

C2 1%	Conveys finer shades of meaning precisely and naturally.
C1 5%	Shows fluent, spontaneous expression in clear, well-structured speech.
B2 15%	Express points of view without noticeable strain.
B1 50%	Relates comprehensibly the main points he/she wants to make.
A2 80%	Relates basic information on, e.g. work, family, free time etc.
A1 95%	Makes simple statements on personal details and very familiar topics.

まず、2007 年度では、受講可能な得点と受講後の目標値は以下のように定めた。かつこの点数は TOEIC 換算点である。

表 5: 受講事前事後の得点 (WeTEC と TOEIC 換算)

	Beginners		Basic		Pre-Intermediate	
	WeTEC	(TOEIC)	WeTEC	(TOEIC)	WeTEC	(TOEIC)
Pre-course scores	354 ≥	(280)	355~524	(281~470)	524~595	(470~550)
Post scores	450	(387)	455~624	(393~583)	600~650	(556~613)
	Intermediate		Pre-Advanced		Advanced	
	WeTEC	(TOEIC)	WeTEC	(TOEIC)	WeTEC	(TOEIC)
Pre-course scores	595~648	(550~610)	648~755	(610~730)	755 ≤	(more than 730)
Post scores	650~730	(613~701)	700~800	(669~780)	800~900	(780~895)

各レベルでの平均点+1 標準偏差を各レベルの閾位値(cut-off points)とみなした。TOEIC 得点と CEFR の関連値として ETS が提案しているのは次のようになっている。

表 6: WeTEC 得点に基づいた閾値と ETS が提案する閾値

レベル	WeTEC 閾値	ETS 提案の閾値
Basic	573 (525 TOEIC)	A2 225 (WeTEC 305)
Pre-Intermediate	608 (565 TOEIC)	B1 550 (WeTEC 595)

Intermediate	733 (705 TOEIC)	B2 785 (WeTEC 804)
Pre-Advanced	800 (780 TOEIC)	C1 880 (WeTEC 890) in 2005 and 945 in 2007
Advanced	880 (870 TOEIC)	提案なし

この論文では前述したように A2 (我々は Basic レベルと呼ぶ) と B1 (準中級レベルと呼ぶ) を扱っている。我々の閾位値の方が ETC 提案よりも得点が高くなっている。そこで、何点とすれば、Bernstein and Balogh (2005)の学習者比率に近くなるかを表3の閾位値に基づいて算定した。

表 7: 2006 年度前期・後期成績

LEVEL	2006 1 <sup>st</sup> term			2006 2 <sup>nd</sup> term		
	Mean	SD	学習者比率	Mean	SD	学習者比率
Basic	573.3	90.6	69%	483.9	174	66%
Pre-Intermediate	607.6	74.4	58%	589.4	105.5	58%
Intermediate	651.2	72.7	21%	626.3	93.1	21%
Pre-Advanced	720.5	80.7	8%	699.9	95.9	12%
Advanced	775.5	105.9	2%	744.9	70.6	4%

表 8: 2007 年度前期・後期成績

LEVEL	2007 1st term			2007 2nd term		
	Mean	SD	学習者比率	Mean	SD	学習者比率
Basic	562.7	106.9	69%	488.3	193.5	62%
Pre-Intermediate	598.5	96.1	58%	562.2	136.6	54%
Intermediate	646.7	85.8	21%	630.8	93.5	21%
Pre-Advanced	717.7	78.4	10%	693.4	93	12%
Advanced	771.2	69.2	3%	759.7	92.8	4%

表 9: 2008 年度前期・後期成績

LEVEL	2008 1st term			2008 2nd term		
	Mean	SD	学習者比率	Mean	SD	学習者比率
Basic	534.3	126	69%	491.9	174.5	66%
Pre-Intermediate	607.9	84.9	58%	579.7	112.4	58%
Intermediate	647	89.9	24%	639.9	86.2	21%
Pre-Advanced	710.4	79.8	12%	689.2	88.1	12%
Advanced	785.7	92.9	4%	748.4	89.9	4%

表 10: 2009 年度前期・後期成績

LEVEL	2009 1 <sup>st</sup> term			2009 2 <sup>nd</sup> term		
	Mean	SD	学習者比率	Mean	SD	学習者比率
Basic	573.1	86.4	73%	486.6	179.9	66%



Pre-Intermediate	622.9	65.7	66%	587.5	117.2	58%
Intermediate	660.1	58.9	24%	639	107.9	24%
Pre-Advanced	722.4	71.4	12%	685.1	106.6	11%
Advanced	807.1	75.8	3%	754	91.4	4%

表 11: 2010 年度前期・後期成績

	2010 1 <sup>st</sup> term			2010 2 <sup>nd</sup> term		
	Mean	SD	学習者比率	Mean	SD	学習者比率
Basic	555.2	114.2	69%	484.7	161	69%
Pre-Intermediate	611.6	88.1	62%	590.7	106.6	58%
Intermediate	653	75.6	27%	643.5	95.4	24%
Pre-Advanced	713.2	94.6	14%	689.1	108	14%
Advanced	804	80.4	4%	764.6	89.3	4%

Basic (A2) と準中級 (B1) の学習者比率は Bernstein and Balogh の提案の 80% と 50% になっていない。この学習者比率を考慮すると各年度の閾位値は以下ようになる。

表 12 : 閾位値 (再計算)

	A2	B1
2006 1 <sup>st</sup> term	526~538	634
2006 2 <sup>nd</sup> term	492~511	624
2007 1 <sup>st</sup> term	521~534	636
2007 2 <sup>nd</sup> term	489~500	623
2008 1 <sup>st</sup> term	513~527	637
2008 2 <sup>nd</sup> term	493~507	630
2009	520~534	641
2010	516~530	643

そこで、A2 は 512~525 WeTEC (472 TOEIC) とし、B1 は ETS の提案に近い元々の 608WeTEC (565TOEIC) の値を維持することにした。

JACET50 周年記念大会で B2 (我々の中級)、C1 (我々は準上級と呼ぶ)、C2 (我々は上級と呼ぶ) で、WeTEC の得点と B2 では CCDL 異文化交流実践講座、C1 では Discussion English Tutorial 中級、C2 では Discussion English Tutorial 上級と組み合わせることで、ETS の提案よりも WeTEC の得点は確かに低い、次の 3 点でこの欠点は補われていることを論じた。

1 毎回の授業で、受講生たちは以下の英語運用能力を判定されている。Interview, Individual Long Turn, Group Work, Pair Work, Discussion をさせながら、各レッスンで示す Can-Do 到達率を判定している。ちなみにこれらの英語運用課題は TOEIC や CambridgeESOL で採用されているスピーキングテストの課題となっているものである。TOEIC では一回のテストで能力判定が行われるが、我々のアプローチの利点は、毎回の授業で繰り返し英語運用能力が判定されることである。

2 出席は 17 回以上が要求され、授業準備、授業中の課題への参加率、毎回のレポート提

出、7 課ごとの復習テストの点数、WeTEC の事前・事後テストの得点で総合評価される。

3 扱っている話題が豊富で、教材の Complexity が保障されている。Discussion Tutorial の例を示す。

English Education: Just one rule can improve English education

Dietary Education: Balanced diet eludes kids of junk food age

Japan Tobacco: Choking at Home

Minorities in Japan: Ainu stepping out of social stigma -- Once invisible minority hopes new indigenous cachet ends legacy of discrimination

Immigration: Barring the people needed

Beauty and cosmetic surgery: When natural beauty just isn't cutting it Tattoos come out of hiding

The young employment turnover: The Young & The Restless -- How changing attitudes toward careers are revolutionizing Japanese employment patterns

The environment and waste: Waribashi -- Waste on a gluttonous scale

Whaling: the meat of the matter

The working poor: Temporary arrangements -- Internet cafes turn into shelters as Japan's 'working poor' struggles to survive

Elderly Criminals: Elderly offenders on rise

Euthanasia: Voluntary euthanasia should be legalized in Japan.

Animal testing: Animals should not be used to test products and medicines for human beings.

語彙レベルも JACET8000 の 8000 レベルの単語が活用されており、時事的な話題の内容も多角的な視点で論理的な討論を要求される内容になっている。以上 3 点の理由で、English Tutorials と CCDL 異文化交流実践講座を受講後、要件満たされれば、B2(中級)、English Tutorial 準上級と Discussion Tutorial (中級)を受講後、要件が満たされれば、C1 (準上級)、English Tutorial 上級と Advanced English Plus または Discussion Tutorial (上級)を受講後、要件が満たされれば、C2 (上級) の認定書を受けることの妥当性が討論された。

### 3. 結論

スキル認定書の発行のため、CEFR の能力記述文に相応するように教材を開発し、Can-do 項目のマッピング表や EU で行われた実験方法を踏襲した研究結果をまとめて報告した。論文の冒頭で述べたように、熊本大学の GP のコンピテンシーマップ作成や投野由紀夫(研究代表)の基盤 (A) では、2.1 で述べた実験を踏襲している。この実験手続きはどこの大学でも踏襲でき、実証できるものである。NHK の英語番組は来年より CEFR 準拠になると聞いている。大学英語教育を国際基準に近づけ、各教員が教えている学生の能力を世界基準の中で位置づけ、可能であれば、スキル認定書を発行することを提言としたい。

### 4. 引用文献

Bernstein, J. and Balogh, J. (2005). The Linkage between PhonePass and CEFR. 小池生夫基盤研究 (A) 科研費による公開講演会、早稲田大学。

European Council. (2001). *The Common European Framework of Reference for Languages*. [http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/Framework\\_EN.pdf](http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/Framework_EN.pdf)

樽松明、内藤与志夫 (2010). 「英語力評価尺度制定による英語講座認証及び個人の能力認

- 定の試み』『JACET-ICT2009 年度実践報告書』社団法人大学英語教育学会・JACET-ICT 調査研究特別委員会編, pp393-434.
- Modern Languages Division, Education Committee, Council for Cultural Co-operation (2001). *Common European Framework of Reference for Languages*. CUP.
- Nakano, M. (2008). Cross-Cultural Distance Learning (CCDL) via Internet and the Assessment of Oral Presentation in English. *13<sup>th</sup> Proceedings of PAAL Conference*. 1-20.
- North, B. & Schneider, G. (1998). Scaling descriptors for language proficiency scales. *Language Testing*, 15(2), 217-263.
- 筒井 英一郎, 近藤 悠介, 中野 美知子. (2007). 日本人英語学習者の実践的発話能力に関する評価基準の検討-Common European Framework of References を基盤として-. 第5回日本テスト学会発表論文抄録集, 88-91.
- Yoshijima, S. and Ohashi, R. et. al. (2004). 『外国語教育Ⅱ-外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 GOETHE-INSTITUTE JAPAN, Asahi Publishing.

本論文は、社団法人大学英語教育学会 (JACET) の許諾を得て下記紀要から抜粋しています。

**【出典情報】**

社団法人大学英語教育学会 (JACET) 2011 年度関東支部学会誌 No. 8  
発行年月日 : 2012 年 3 月 31 日  
掲載頁 : 48 頁～59 頁